

(論文)

1978年3月〈春の嵐〉の後で 霞の中の「成熟社会」を遠望する

野田茂徳

キーワード

成熟社会 「宇宙船〈地球号〉」 過渡的季節 権威主義の失墜 個的存在の尊厳

今年（1978年）の春は、雷をともなった嵐とともにやってきた。嵐がすっかり通り過ぎた東京の空は一面澄み渡っていた。文字通り紺碧の空だった。

このように、〈春の嵐〉が、春を呼び寄せ確かなる約束をもたらすのなら、ひとはそれに耐え、来るべき季節のために準備して待つ。自然の現象の中であって、ひとは時にひどい仕打ちを受けることがある。しかし、まだ自然には救いも残っている。

我われが生きているこの時代をして、後世のひとはなんと呼ぶであろうか。自然の現象のように、確実に〈春の嵐〉が今すぐそこに来ている、それを待ち、耐えている時代であろうか。

〈現在〉、季節が巡り、やさしさと喜びと、そうして悲しみと忍耐とを人びとに教える自然に抱かれているそのような、名づけようのない〈過渡的季節〉には入っているのだといえよう。

この名づけようのない季節は、確かな季節をひとつ失った時代でもある。

宇宙の大海を漂流しているのは、かつてケネス・E・ボールディングが比喩として使用した「宇宙船〈地球号〉」である。「宇宙船〈地球号〉」は、かつて役にたった羅針盤が、今や全く役に立たない時空の中にいるのだ。

漂流している「宇宙船〈地球号〉」といっても、それはけっして「目的地」が全く失われてしまったわけではない。もちろん「目的地」については乗船している満員の人びとが、みな同じというわけではない。多様な「目的地」は、やがて漂流状態から抜け出すことができ、乗船して人びとの力で操舵でき航行可能と認められる状態になったら、その時「宇宙船〈地球号〉」は、各人の「目的地」は各人の希望となり、夢に見たおだやかな世界が広がっていくのが遠景にみえてくることになる。まさに「宇宙船〈地球号〉」に生命を持ち生きているあらゆる生きもの、空・陸・海・地中・海底の奥深くに住むあらゆる生きもの、そうして宇宙における地球そのものの〈命運〉につながるものが運命共同体をなしているのである。

さて、こんにち（1978年）、わがくにの思想的状況を見た時、旧態依然とした「目的地」につ
のだ しげのり：筑波大学 名誉教授

いての議論がなされている。それは19世紀の価値の根拠にたった発想から抜けだせないものばかりである。議論しているテーブルは19世紀の世界地図と19世紀に出版された書物が積まれているありさまだ。それを「聖書」の如く暗誦しているのである。政治経済の現象あるいは活動が自然現象の成長や衰退現象になぞられていた緩やかな時代には、そうした議論の余地もあった。むしろそうした議論こそ20世紀的なものがユートピアと幻覚してきたコンテクストになりえたのである。

無秩序に達成したとしかいいようのない、あまりにも短時間の間に成し遂げられた急激な工業化社会から弊害が出てきて、それを支えてきた「成長の理論」を見直した時、今や眼前にするものは「成長の理論」の無表情な「論文」の山が「紙くず」のように放り出されている光景である。

そう遠くない過去である60年代の「成長の理論」が、わがくにでは急激な勢いで「化石」化しつつあるのだ。

かつての「成長の理論」を主張し、展開してきたエコノミストたちは「安定成長の理論」の提唱者に変貌してしまった。まさに「君子豹変」である。

資本主義の理念であろうが、社会主義の理念であろうが、その実現のために高度の倫理性を内面に持った「伝道者」たちが頑張っても、現実には双方において安易な都合のいい読み替え可能な倫理に押し切られてきたのである。貨幣における「グレシャムの法則」は貨幣における「法則」であるだけではない。人倫においても有効であり、生きている。

高度成長を達成した工業国〈にっぽん〉は公害先進国にもなったのだ。無計画なままに「成長の理論」に依存していた裏側では公害のたれ流しが横行していた。何のための成長なのか、一度疑ってみれば分かることであった。急速な成長を望んだのは資本家、経営者だけであっただろうか。そうして、公害のたれ流しを「業務」として会社ぐるみで実行したのは誰だったのだろうか。労働者も公害の加害者ではなかったのか。

無秩序な急激な成長は〈にんげん〉の生活環境を変えてしまい破壊してしまうことにつながると考えた経営者がいたのも事実である。

高度経済成長の花盛りの木の下で「高度経済成長政策」を批判していた経営者が確かにいたことを思い出す人も少なくないことだろう。

そうして一方で、公害による被害者に石を投げつけるようなことを「業務」として行い、またガードマンが過剰な警備行為に出た時、見てみぬふりをした労働者がいたのも事実である。

こうしたことは新聞やTVで報道された中に、チッソの「水俣」で見られた光景だけのことでなく、「一家」意識の強い日本の企業の中では容易に見られた光景であった。

こうした時代にあって経営者、資本家と労働者は対立構造として考えることは、必ずしも事実らしくしていない。つまり両者のどちらか一方が絶対体に善であり他方が絶対的に悪であるという決め方が、わがくにでは意味をもたなくなって来たのである。あらゆるものが、大衆化し中産階級化して来たことによって善玉と悪玉は、同じ容器の中で混在しているのである。

昨年（1977年）総理府が発表した国民の意識調査によれば、自分の生活程度を「中の中」と回答した人が90%であった。これを見た時、わがくにに18世紀末から19世紀にかけて発展したいわゆる産業革命（工業革命）後、ヨーロッパに登場した労働者階級の「労働者」の概念に基づいた「意識」は消えてしまっているのである。この意識調査によれば、国民の大多数が、自分は中産階級の生活をしていると自覚していることになるのである。わがくにでは大衆は中産階級を構成しているのである。また大衆は中産階級を占有してしまったともいえるのだ。

こうした中であって、実に根気よく19世紀的発想によるイデオロギーの「伝道」と「布教」を繰り返している人びとの建前が、実に危ういものであることがわかる。これは何も宗教団体だけのことでなく、政党のこともある。「中の中」の生活意識を持った国民大衆の前で、19世紀的演説をする、共産党や社会党が密教的に収集して行った昨今の党内闘争は、大衆の方で愛想を尽かしてしまったのである。

共産党にしてみれば、自分たちの批判をするものすべてに「反共」というレッテルを貼ることによって、自分たちの絶対的無謬説を唱えて「聖座」を守ろうとする。その行為はファシストが自分たちに非協力的な者をすべて「アカ」と呼んで弾圧していたことと同じ論理であり、同じレベルであることに気付かない愚行である。

『文芸春秋』や『週刊新潮』というものが共産党にとって見れば代表的「反共ジャーナリズム」ということだ。それらの雑誌は時によれば「反宗教」、「反共」、「反過激派」であり、ある時には「反自民」、「反権力」でもある、ということが「事実」ある。偏狭なナショナリズムが見えかくれするのも事実である。左右のイデオロギーをふりかざす政党は右であれ左であれ、それをもちあげるジャーナリズムも「神」について議論したり、「神」という概念について検討したりすることさえも許さない護教的精神以外何もない教条主義者と同じである。そういう人たちには古典的「イエズス会」の如き使命感に満ち溢れている「信仰深い人たち」と持ち上げていれば気がすむのであろうか。

それらの人たちは自分たちの考えや主張が絶対的真理であり、永久に正しいということだけを呪文のように繰り返しているだけの人たちである。

宗教団体であれ、政党であれ批判者、反対者は「異端」であり、邪教の信者であるから排除してしまってもかまわないという考え方である。「アカ」とか「反共」とかいて、相手を排除してしまう論理は、まさに偏狭な宗教的政治意識なのである。古代的遺制の如き意識が19世紀的イデオロギーの伝道者に受け継がれているだけであった。

『文芸春秋』、『週刊新潮』は偏狭なナショナリズムをかかげることはあってもその商業主義は『anan』『non-no』、そうして発刊されては消えていく大衆向けの多くの雑誌と何の変わりがあろうか。編集技術の上手、下手ということはある。それこそ読者は「好み」で選んでいるだけのことである。社会党や共産党はそれぞれ政党機関紙・誌を発行しており、否応なく大衆化することを望んでいる。そのことは否定できないのである。

少なくとも、現代日本の商業レベルの大衆感覚の感受性は社会党や共産党の機関紙・誌の水準よりもはるかにましなのだ。そうした現実を現実として認めることができないようでは、大衆にましますそっぽを向かれることになるであろう。

かつて「未来」に向かって希望を持っていなかった大衆は、暗い中「千年王国」の到来を望みつづけていた。宗教がそうした大衆に生きる活力を与えた時代もあった。今日もそうした夢や幻想を持たせる宗教も存在する。高度経済成長をした〈にっぽん〉では「千年王国」が「夢」でなく「現実」の中に日々訪れるわけである。「ご利益」に結びついた宗教は高度経済成長を達した〈にっぽん〉で繁栄したのである。不況の時代に入りアフター・サービスを宗教はやらねばならないが、ここで夢を現実化したのも大衆であり、現在もこれからも「ご利益」の夢を食いつなぐのも大衆自身である。

3

社会党や共産党が大衆によって支持をえていると本気で信じていたとは思わないが、それに民社党を加えたイデオロギー政党は19世紀的ルーツを持った「社会主義」政党である。それに公明党

のような創価学会という宗教団体にルーツを持ち、選挙活動ではそこに全面的に依存する宗教をバックにした政党が加わっている。

これらのいずれの政党をとっても固定票だけでは、選挙の結果は投票前から保守連合政党の自民党に敗北している。「中の中」を意識している大衆が、19世紀のルーツの政党や不況のためにアフター・サービスが高負担になり「ご利益」が少なくなってしまうような事態になった時、イデオロギー政党や宗教的ルーツの政党に対してどのような反応を示すだろうか。

自民党が保守連合政党であることは、その派閥構成を見ても誰の目にも明らかである。党内は偏狭なナショナリストからリベラリストまでおり百家争鳴である。日本の近代化を推し進めることが必ずしも、工業化ということだけではなく、〈近代の精神〉とは何かということをもいつも検討し、日本の土壌に受容できる環境を作りながら政治を行おうとしている派閥もあれば、19世紀の保守主義に囚われたイデオロギーを後生大事にしている派閥もある。保守的土壌において現実に存在していることは、決して不思議なことではない。なぜならばこのような〈意識〉は、信仰者のそれに似ていて、左右パラレルなものとして存在しているのである。

この大衆化した状況は、イデオロギーによって善悪を決するような、問題ではなくなっているのである。そのことを分からずして現実は何も見えてこないのである。

「大衆という者は愚かなる群集である」ということを、現代において古代ギリシアの哲人に因んで言うことは自由である。確かに大衆には〈のっぺらぼう〉な貌がある。だが、時間が経つてみると〈のっぺらぼう〉から立派なかたちをした貌になっていることもある。

わがくにの現代のこの時代における大衆というものは、ちゃんとした風貌を持っている。「選挙」にしても大衆は政党に翻弄されているのではない。第二次世界大戦の敗戦後32年目に「中の中」の快適な生活をしているという実感を獲得するまでに、大衆は己の身の丈に合った政治的選択をして来たと、とることができるのではなかろうか。

「伝道者」が固執するほどのものが、未来の約束として不確かな「ご利益」だった時、大衆は確かなものを選択してきたと考えることができる。或る社会学者はこのような「うごめく時代」を「無思想の時代」と呼ぶ。社会の生活様式を風俗として見るならば『anan』や『non-no』そのものである。「無思想時代」のメディアとして大衆的に飛躍した『文芸春秋』や『週刊新潮』等もその例外ではない。

〈につぼん〉の高度経済成長とその衰退の現象にあわせたように、社会党や共産党が総選挙で一喜一憂している様は、「無思想時代」の大衆の〈意識〉と無関係ではない。

自民党が大衆から離れてしまい暴走することのないように取り付けられた「減速装置」の役目として社会党、共産党の存在価値はあるような状態である。そうしたことを自覚しない限り近代政党としては、歴史的に没落してしまうであろう。そうでなければ、密教的サークルに還元されてしまうのである。

ケネス・E・ボールディングが急テンポの工業化によって地球を喰いつぶしつつある人間が生き残って共存してゆくためには「宇宙船〈地球号〉」のたった一人の乗組員のエゴイズムでも「宇宙船〈地球号〉」を破壊してしまうという警告を発して久しい。

「宇宙船〈地球号〉」という概念は経済学者の独占した概念ではなく、毎日、テレビのブラウン管にコマーシャルに使われるほどになった。しかし、そのことは地球環境に対する危機意識が高まっ

たためとはいえないのである。「われら宇宙船地球号の乗組員」という言い方が、耳ざわりがいいというだけで、コマーシャルに使われているに過ぎないのである。

現実には、この不況を克服するために、資源を燃やし尽くすようなことがもっと必要である、といったばかげた内容を覗かしながら消費を刺激し一方では資源の無駄使いを抑止する「宇宙船〈地球号〉」の運命について思いをめぐらしているようなコマーシャルが同居しているのが〈にっぽん〉の現実である。これらのコマーシャル現象が、矛盾しなくなるような日常性が、どのような将来であるかということと、人類の将来は密接な関係がある。

わがくにの高度経済成長の限界が地球的規模で考えた場合も、早晚訪れるものであった。今生存している人類あるいはその数世代後まで考えても資源は十分に残っているという楽観主義者もいる。しかしそうした数世代という短い期間の保証でしか生きていない人類はニヒリズムに陥ることになる。われわれ自身が生き残れても或る世代で資源を使い果たすことになる。その数値的予測に対してはわれわれ自身も責任があるのである。生き残る最期の世代に対しても最善の環境を残そう努力なしには、「宇宙船〈地球号〉」の最期の世代はわれわれ自身になってしまう危機にいつもさらされている。

現実とは現実なるがゆえに流動し成長し消滅する。現実とは停止したことがない。人間の思想が、人間に奉仕する者である限り、人間社会の現実から逃避してはならない。思想さえ「化石」化してしまう現実がある。ほとんどが「化石」にならないで、現実の前で腐蝕してしまう。そうして〈かたち〉をなさないものになってしまう。

もはや「宇宙船〈地球号〉」の現実とは、19世紀の社会主義者のこの世に千年王国の実現をもたらす「演説」も、資本家にとって独占資本主義の栄華の夢を求めるかれらの「福音」も、こころの中に向かって「演説」や「夢」を夢見ることの自由以外に何の特権も存在しないのだ。

わがくにの戦後30年は封建的遺制としての「権威主義」が錆びついて腐食がすすんでカッコつきの「権威」が失墜していく時間でもあった。これこそ中産階級化した大衆の意識と変化が大きく関わっていることである。

ハーマン・カーンに言わせると2台の自動車を同時に崖淵までぶっとばして走らせて競争をすると、怖くなって早くブレーキを踏んだ方が勝負に負けたことになるのである。このゲームは「チキン・ゲーム（ひよっこゲーム）」と呼ばれていた。ハーマン・カーンはこのゲームをやるのは「不良少年」たちと国家だけである、という。ゲームの参加した両者が崖淵まで強気で相手がブレーキを踏むまで待ち続ければ、両者は相手待ちで、何時になってもブレーキは踏めない。両者は崖淵までブレーキがかけられずに崖から落ちて死んでしまう。こうした危険なゲームが「不良少年」たちや国家間だけで行われるゲームだと言うハーマン・カーンには、冷徹な眼がある。否、イデオロギーであろうが信仰であろうが、そうした者を盾にしてチキン・ゲームをやるものは、「不良少年」のカテゴリーに入ると言うハーマン・カーンは相当の皮肉屋だ。

5

ハーマン・カーンはペンタゴンをはじめアメリカ政府から大量の仕事をもたらしているシンクタンク「ハドソン研究所」の代表だからである。ハーマン・カーンは「不良少年」アメリカが崖淵から転落して死ぬことがないように、「ブレーキ」をかけるタイミングを教えているつもりなのだ。

「宇宙船〈地球号〉」に乗っている自覚があれば、いかなる「チキン・ゲーム」も許されない。自分の愚かな行為が「宇宙船〈地球号〉」を宇宙の大海に沈めてしまうことを自覚しておかねばならないからである。

こうした時、きまって民主主義体制は強力な指導者が必要である、というプロパガンダがなされる。過去の歴史上、ヨーロッパにおきた全体主義がはびこった時、そのような騒ぎがおきた。

「宇宙船〈地球号〉」の運命はけっして全体主義的政治手法で決められるべきものではない。むしろ徹底した民主主義によって、「宇宙船〈地球号〉」の構成員の一人ひとりの〈いのち〉の尊厳を第一にするところから出発すれば、おのずと手法が決まるであろう。時間や資源の高価な代償を払うことになったとしても、そのことが自分の運命を地球的規模の責任としての考えると高度の倫理的自覚が増大するであろう。

民主主義体制では代議士等の政治家を選ぶことはしても、独裁者を選んではいけないのだ。政治家たちは政治的失敗や政治家の倫理に反することを重ねていった場合は、自ら責任をとり、議員を辞職しなければならないのが、最小限度の政治家としての倫理である。そうした自覚がない人は政治家を志すべきではない。

大衆化した「中の中」の生活意識にたって省みる時、指導者は右のような覚悟なしに政治を行ってはならない。また大衆は政治的指導者にすべて責任をとらせるのではなく、自分も責任の一端を担わなければ〈のっぺらぼう〉の大衆、ファシズムに賛同した群衆になってしまうのである。そこには政治が作り出している誰も責任をとらない無責任な「倫理」の構造が存在していることも知らねばならなくなる。

今日問題になっている学校教育の荒廃は教師の問題でもあるが、同時に「紋切り型」の受験勉強を重大視してきた文部省の指示によるカリキュラムの問題が大きい。その責任は重大である。それとは別に核家族化し、少子化が進み、家族総ぐるみの相互扶助的教育環境がなくなったため、両親だけで子育てと教育をするのは苛酷な状況になっている。家庭教育の現場における困難な課題を棚上げて議論をしているのである。子どもは「自然」に育っているのではない。まず家庭の日常生活が情報源であり、子どもの第一次の環境としてのコピーがなされるべき倫理の原点である。

国民の誰でもが高等教育を受ける機会があり、それに見合うように高度経済成長が大衆の「中の中」の生活意識を支えた。しかし、日常の倫理や教育理念が「中の中」に達するとはどういうことなのか。人倫についてにわかに子どもたちに伝達できなかったのではなかろうか。

民主主義の手法は、自分たちの〈行くべく目的地〉について十分な議論と納得もないまま、ただ船長に「お任せ」してしまうようなことであってはならない。行き先が違ったり、遭難したり、遭難しかかって始めて船長を無能だと批判してもダメなのである。そうした手法は民主主義ではない。なにがとも「一任」にしたり「まかせっきり」にしたりではいけない。学校教育と家庭教育は、別個のものとしてそれぞれ重要なものである。教育は学校や家庭だけのものではなく、社会全体でやらねばならない社会教育もある。今日では、就職して初めて教育らしい教育を会社の教育システムの中で学んだという人たちもいる。教育は学校だけではなく子どもの生活の総和が、同時に子どもたちにとっての教育の総和でもある。

今日では経済成長で工業革命がすすみ、生産だけではなく技術情報・知識に対する新しい需要がおきてきた。そのような状況はこれからますます発展していくであろうが、〈にんげん〉のあり方そのものが倫理的にそのような新しい状況に対応していつているか、問題が生じるであろう。さらに技術情報・知識に対する倫理的規範が今までの倫理的規範では対応できない領域に広がっていくのは時間の問題である。通信・情報・知識が複合した情報革命として進めば進むほど困難な問題は

新たに生まれてくる。

なぜなら〈倫理〉の領域では教育効果が目に見えるような形で成長を遂げ続けることには限界があるからである。その一つは〈にんげん〉の寿命というものがあり、そこに個の限界がある。〈にんげん〉は一代限りの〈いのち〉であり、常にデオキシリボ核酸（DNA）に組み込まれていない経験や、体験の中で学習していかねばならないものが多く、それらの一部である共通の知識・情報は、次世代が新たに学習して取得していくものである。

倫理をDNAの如く、意識しないで身につけさせるためには、まさに生活の総和として倫理的環境の整備が必要であろう。

倫理的規範は時代から超越したところでは存立し得ない。それでも普遍的なことは〈個的存在としての《にんげん》の尊厳〉である。

さて、この時代の総体的状況を見てきたが、19世紀的スローガンをここに提示するとたちどころに「不渡手形」に換わってしまう未来予測の演技をご覧いただく必要もないであろう。あたりまえのことをあたりまえに考えることが、何よりも大切なことなのだ。そうした現状認識が、各自が自分の生きている時代を支えていることになるのである。

「宇宙船〈地球号〉」の一乗組員としてすべての生命・環境的視点からわがくにの進むべき道を考えること以外に人類が生き残るための展望は開けないであろう。

1971年ノーベル物理学賞を受賞したD・ガボールは高度経済成長がなされた後の社会を夢見て『成熟社会（The Mature Society）』（1972年）という本を著した。それはガボールに言わせると、高度経済成長の後は環境も破壊されず自然との調和が保たれ、社会内部でも平和な関係にある社会として成熟と呼んだのであった。

ガボールもけっして「成熟社会」への展望を楽観していたわけではない。ガボールは次の如く言う。

「戦術でいちばんむずかしいのは、秩序のある退却をすることである。なぜならばそれは、現在のわれわれの世界が『発展』の途上にある多くの局面を持っている以上、その局面においては後退を意味するからである。／われわれの世界は人口の増加に向かって進んでいる。今やわれわれは約140の『君主』国家を持ち、古くからあるあるいはいくつかの大国においては、さらに活発な分離主義者や『地域主義者』そして『人種主義グループ』が活動している。とても統一どころではない。現在、世界の全人口を破滅させるのに十分な武器があるにもかかわらず、まだなお軍事技術は急速な進歩をつづけている。現在の産業能力からすれば、より多くの自動車をつくれれば、固体廃棄物も使い捨て容器も、公害もますます多くつくりつづけることになる。人口が都市地域と郊外に集中すれば、一方都心が衰退していく。非共産主義国家では、労働者と経営者の『乱戦』がすさまじいインフレを引き起こし、常に経済不安の原因になっている。これらすべて、活発に一人で歩いていってしまう傾向があるが、われわれはそれを押しとどめ、逆方向に変えなくてはならない。」（林雄二郎訳）

どれをとっても今日、明日即座に解決できるような問題ではない。それゆえに「宇宙船〈地球号〉」の運命は恒常的危機の状態にある。

本当の調和のとれた「成熟社会」に達するまでに「宇宙船〈地球号〉」は宇宙の大海を航行し続けるであろう。先進工業国に達するまでに使った英知とエネルギーを「成熟社会」をつくるために使うべきであろうことが、われわれの前に残されている課題であろう。「宇宙船〈地球号〉」の現状はあらかじめ準備された「海図」が使いものにならない、羅針盤も新しく作り直さねばならぬ状況である。〈にんげん〉が自然の中で一個の存在として謙虚になり、自然との調和を重んじ、そこか

1978年3月〈春の嵐〉の後で霞の中の「成熟社会」を遠望する

ら自然として残された〈にんげん〉の創造的英知を生かしていくことが、最後に残された課題を解く〈にんげん〉の果たさなければならない役目になっているように思う。

(1978年3月)

注 記 本稿は1978年3月脱稿したものである。したがって政党名、政府省庁名、その他の時制は1978年3月の時点での表記である。

後注にかえて——「1978年3月〈春の嵐〉の後で霞の中の『成熟社会』を遠望する」についての覚書

この論文は1978年3月『朝日ジャーナル』誌の依頼で書いたものであった。こんにちではあたりまえのことがらになっている事柄だが、当時ではおおきなメディアでは気をつけないといけなかったようである。それで、具体的に「書きすぎ」ているということで担当編集記者から婉曲的に一部分の改稿を求められたが、わたくしには既に他の雑誌や新聞の原稿でも内容は異なるが、改稿すれば論文の趣旨がよく伝わらなくなる場合には「このままで掲載をお願いしたい。もちろん掲載するかしないかの編集権は編集部にあるので、ご自由にご判断を」と言ってきた。その時もそのように対応したのであった。担当の編集記者は副編集長の高橋文利であった。

原稿依頼は3月後半に発行するものの巻頭論文として予定しているのでよろしくということであったが、私が改稿しなかったため3月末の企画を変えなくてはならなくなり、彼は困っていた。4月に入り、彼は自ら署名入りの原稿を巻頭論文として書き編集記者の責任を果たしたのであった。

「掲載されなかった原稿」について、高橋は自分が預かったままであると言うので「遠慮なく」返してくれるように言ったらようやく、4月後半になって返却されてきた。原稿は書庫の本棚に先日まで置いたままにしておいた。

高橋文利はもともと朝日新聞経済部記者であった。彼とは1960年代後半から公私ともに長い付き合いであった。1970年代初頭の数年ローマで研究生生活を送っていたわたくしのもとに、当時朝日新聞ロンドン特派員であった彼は、突然電報を打ってきた。「サウジアラビアの出張の帰りに君に会いたくなった」と。この時のサウジアラビア出張については、彼は日本人記者としてはじめてサウジアラビアの石油鉱物資源相アハマド・ザキ・ヤマニとのインタビューに成功したと報道された。

- 8 『朝日ジャーナル』の編集部には他に政治部から出向いた編集記者をはじめ何人か知り合いもいたが、特にこの原稿の件について意見を交わさなかった。高橋は他者に対して人のいいところがありやさしい人の一面もあったから編集部のいろんな意見を忖度して「改稿」を依頼したのだと思った。それをこちらが断ったことで、彼が困っていたことを知っていただけに気のどくな思いがしていた。彼とはその後も付き合いは続いていた。

彼は再び朝日新聞経済部に戻り大阪本社経済部長、福岡駐在論説委員などを経て論説副主幹を務

め、さらにアメリカでの研究活を経て50代半ばで退職して立命館大学政策科学部教授に就任した。そうして2002年8月故郷の長野県下諏訪町の脱ダム運動の選挙に担がれて当選を果たした。

しかし2004年11月3日、国土交通省に陳情のために上京し練馬区の旧宅に滞在中「心筋梗塞」で急死したとテレビの速報で報道された。後に「町長のスケジュール」で知ったのだが、過労による労災とでもいうべき過酷なものであった。新聞記者そうして大学教授それから故郷の町長として活躍していった彼の生涯は、全身に満ちていた夢を果たさんと生き急いでいたように思えてならない。

(受理 平成28年9月26日)